

— NO211 8月号

# FOREST NEWS

未来を守る木を植える  
未来を育てる木を植える



## 2025年度 指標

- ①パンタナール地域における潜在自然植生の混植密植形式の植樹の実施
- ②国内において累計 500 本の植樹活動
- ③植樹を通じた環境問題解決のロールモデルをつくる
- ④セミナー や植樹祭を通じて「家族で木を植える」文化の啓蒙
- ⑤混植密植の植樹を推進する他団体との連携



理事長メッセージ

## 理想的な屋敷林の作り方を紹介します

先回、地表面の熱射を防ぐ緑陰作りについてお話しましたので、今回はその具体的な方法について解説します。まず、生け垣を高くします。昔は集落や屋敷の周りに、北風や西日を防ぐため常緑樹を植えました。西日が当たると蚕が死ぬといわれ、人間だけでなく家畜にもよい環境を作る工夫をしたのです。北側と西側には土地本来の樹種を植えます。関東内陸部ではシラカシ、アラカシ、ウラジロガシ、海岸近くではタブノキ、シイノキなどです。

南側と東側には、夏は木陰、冬は陽ざしを得るために、ケヤキやエノキなどの落葉広葉樹を植えます。その下に生け垣を設置し、土地本来の常緑広葉樹を植えることで、防災機能も兼ね備えます。また、冬の花はカンツバキやサザンカ、春にはクチナシやジンチョウゲなどが美しいです。

さらに、潮風が強い地域では、トベラやハマヒサカキ、シャリンバイなどの樹種が有効です。マンションの場合、高層建築の下に芝生や低木だけを植えるのではなく、周りの空き地にシラカシやアラカシを一本でも植えることで緑陰作りに貢献します。それが難しい場合、ベランダでドングリを育てる方法もあります。鉢に播き、落ち葉をかぶせて毎日観察することで、成長の喜びを体感できます。

老若問わず、未来を見据えた環境づくりとして始めやすい小さな一歩です。さらに、土地本来の樹種で構成された林は、環境保全機能や防災能力を発揮するだけでなく、四季折々の景観美や安らぎを提供してくれます。緑の力を利用し、地域全体で環境を守る姿勢が求められます。

## ～海外活動レポート～

### — IGES-JISE国際生態学センターが手掛ける植樹活動に参加 —

8月20日、神奈川県内のスズキ横浜研究所では、IGES-JISE国際生態学センターの主幹研究員である目黒伸一先生の指導の下、宮脇方式による植樹活動が行われました。この取り組みは、持続可能な社会を目指すIGESの一部門であるJISEの活動の一環で、地域の生態系回復や自然再生に大きく貢献しています。

今回は6m<sup>2</sup>と22m<sup>2</sup>、さらに9月以降には23m<sup>2</sup>のエリアで植樹が計画され、その中で2か所の耕耘作業や植樹事前準備も実施されました。特に、横浜国立大学で教鞭をとる目黒先生の講義に感銘を受けた学生3名がこの活動に参加し、植生工学士5名の専門家とともに、熱心に作業に取り組みました。

目黒先生は、南アジア、アフリカ、そして南米アマゾンなど、世界各地で植生調査や宮脇式植樹の実践を行ってきた経験を持つ専門家です。



今回、当法人が実施したパンタール地域での植樹活動や、能登七尾でタブノキを用いた植樹プロジェクトに深い関心を寄せ、今後の情報交換への期待を示されました。植樹活動を通じて国際的視点を持つ指導者との出会いは、パンタール地域での活動がより広いスケールでの環境保全に繋がる可能性を感じずにはいられませんでした。（事務局 藤生）



#### IGES-JISE国際生態学センターとは？

ミッションである持続可能な社会の実現を支援しながら、特に生態学に焦点を当てた研究と実践を進めています。

また、生物多様性の保全や自然再生を軸にしたプロジェクトを推進し、地域から地球規模までの環境改善を目指すことで、IGES全体の目標である環境政策や実践戦略の構築に具体的な支援を提供しています。

具体的には、里山の生態系回復や宮脇方式を用いた森林再生がその主な活動の一部となっています

## 「森づくりセミナー」と「タブノキ苗をビニールポットへ植替」を開催しました in 船橋支部

日時：8/9(土) 13:00～14:30

場所：船橋中央公民館

参加者：船橋市内の中学・高校・専門学校生9名、父母1人、スタッフ5名

### 地域のつながりを育むセミナー

これまで高津先生の映像を通じて深めてきた「森づくり」に関する知識。このたび、河原支部長が自らの言葉で語る初のセミナーが実現しました。

河原支部長はその熱意と経験をもって、参加者に「森の持つ命の力」と「自然と共に歩む大切さ」を深く伝える内容となりました。さらに、このセミナーを支える形で、伊藤が作成した2部構成のパワーポイントが使用され、「命を守る森」というテーマは、行動へと駆り立てる力強いメッセージとして、多くの共感を呼び起きました。



特に注目すべきは、参加者の変化。最初は緊張した面持ちでセミナーに臨んだ方々も、「タブノキ苗のビニールポット植替」の実習が始まると、土に触れる中で自然と心が解け、笑顔が広がりました。中学生を送り届けてくれた保護者も講座に参加し、世代を超えたつながりが生まれる場面も見られました。

土を使い切るために皆が協力し合う姿、自然への感謝を分かち合うひととき。これこそが森づくりの真髄であり、地域の絆をより強固にする瞬間だったといえるでしょう。参加者の温かい笑顔が、それを何よりも物語っていました（船橋支部 伊藤）